

# 字、茶——字音のみの漢字

## 字音と字訓

漢字は一般に、「音(字音とも)」と「訓(字訓とも)」の二つをもっている。「音」は中国から古く伝わった漢字の発音が日本語化した読み方、「訓」は漢字の意味を日本語で表した固定的な読み方である。「山」「川」であれば、「サン」「セン」が「音」で、「やま」「かわ」が「訓」である。

ところが、後に挙げるような漢字は、訓がないか、あっても現在はほとんど用いられない。熟語も作るけれども一字が「音」で独立して使われている。いわば「字音専用字」である。名乗りの訓は考慮しないで「常用漢字表」(二〇一〇年)から名詞性の強い、主なものを挙げてみた。

胃 絵 駅 恩 害 勘 気 菊 匂 芸 券 碁 孝 紺

棧 <small>せん</small>	死	師	字(「もじ」の意味)	軸	式	塾	錠	職	仁	性 <small>せいしょう</small>	税		
栓	線	禅	僧	賊	題	段	壇	茶	蝶	点(「ドット」の意味)			
党	塔	徳	毒	肉	脳	肺	倍	鉢	罰	服	魔	幕	脈
厄	役	欄	寮	礼	湾	碗							

これらは、中国語の発音が日本語化した読みそのままに定着し用いられている。

## 一つの漢字は一つの漢語

漢字は、個々に一定の形があり、発音ができ、しかも(仮名やローマ字などと違って)意味もそなえている。つまりそれぞれが字であると同時に語(単語)である。先に挙げた字は、現在の日本語の中で訓の存在しない単一の「漢語」(字音語)といえる(一般に「漢語」といえば、二字の熟語が思い出されるが、日常語の中に一字の漢語は意外に多い)。

「もじ」の意味を表す「字」も、その一つである。

私たちは感情・意志や情報・思想を伝える主要な手段として、言葉を用いる。その言葉による伝達は、「話し言葉」(音声言語)と「書き言葉」(文字言語)の両面によってなされている。音声言語は、文字言語よりはるか前に発生した。口から耳へという過程を通して行われる音声

言語は、より直接的ではあるが、本来は一回限りで瞬間的に消え去り、また遠方に伝えることができない（それに、情報量や正確さという面でも問題がある）。

文字は、音声のこのような時間的な制約と空間的な限界を乗り越えようとする必要と欲求から生み出されたものと考えられる。文化が進むにつれて、音声を固定し、記録・保存することが必要になる。文字は人間の偉大な発明の一つである。

### 「字」に訓がないのは？

「字」という漢字は、漢和辞典で、「宀」の部首に入れるものと「子」の部首に収めるものがある。おおむね共通していることをまとめると、「宀」＋「子」から成る会意兼形声文字で、現行の「ジ」の発音は呉音とされる。「宀」（呉音メン・漢音ベン）は、屋根の形にかたどり「いえ」を示し、「子」（呉音・漢音シ）は、頭が大きく、手足のなよなよした乳児の形にかたどって「こ」を表す。「字」は、「家の中で子を生む」ことを原義とし、派生して「ます（増）」、「やしなう（養）」意味に広がる。

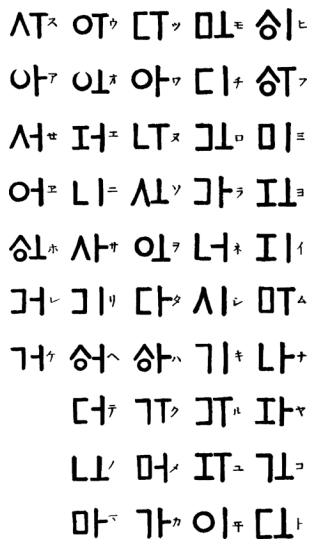
本項目で話題としている「もじ」の意味はそこから生じる。それは、基本構成の単体字＝象形・指事の字を基とし、その組み合わせによる複体字＝会意・形声の字が、あたかも子が生ま

れるように次々と生じ増すから、という（ちなみにもともとは、単体字を「文」といい、複体字が「字」であるが、のちに広く全体を「字」あるいは「文字」と総称するようになった）。

日本には、漢字の伝来する前から、古代に固有の文字が存在したとする説が特に鎌倉・室町時代の神道家の間に広まり、それを受けて江戸時代後期、一部の国学者などによって盛んに主張された。いわゆる神代文字で、多種のものが指摘されているが、中でも平田篤胤の『神字日文伝』（一八一九）の「日文」がよく例に挙げられる（図版は「日文四十七音」とする字母表である）。それは対馬の阿比留家に伝わるものとされ、四十七字の表音文字から成る。上代



『説文解字』の「字」



平田篤胤の「日文」

の日本語の音韻体系に合わず朝鮮のハングルに類似した点が多い。他の神代文字も後世の偽作として現在は否定されている（『平凡社 日本史大事典』などによる）。

『日本書紀』と『古事記』は応神天皇の条に、百済の王仁が『論語』と『千字文』を携えて来朝した記事を載せる。漢籍の正式な伝来をうかがわせるものである。四世紀ないし五世紀初頭であつたろうという。

単一の一字にせよ、文字列を構成する複数のものにせよ、日本人が最初に接した文字はおそらく漢字であり（もつとも、字を目にすること、機能・役割が分かること、使いこなすことは、異なる段階であり、別の次元に属している）、それは『古事記』などに記す漢籍伝来の時期をはるかにさかのぼる時代であつたに違いない。

日本に存在しない事物や概念が外国から流入したとき、外国語の発音をそのまま（多くはなまつて）取り入れることは、現在もよくあることである。

古く「字」も同じで、系統立った書記手段の「もじ」が存在しない前に漢字がもたらされた。日本語（いわゆる字訓）で言い表すことはせず、外国語である中国語音をもとに日本語化した発音（いわゆる字音）の「ジ」で受け止めたといえよう。つまり、字訓のない字音だけの漢字となつた。それは、単一の「字」の発音でもあり、広く「もじ」というもの全体をさす名称でもある。

もある。

『日本国語大辞典 第二版』（小学館）は「な（名）」の語義の一つに「文字。古く、その物に対する名称の意から転用したもの。真名（まな）、仮名（かりな・かな）など。」と記し、また「かな（仮名）」の項の語源説に「ナ」は字を意味する古語」とし、その説の出所に『和訓栞』（一七七七年から刊行）、『古事記伝』（一七九八年成立）などを挙げるが、「な」は「字」の訓として定着しなかつた。

また、『類聚名義抄』（平安末期成立の漢和辞書）や、『字鏡集』（鎌倉初期成立の漢和字書）は、「字」に「ナ、ナツク」の古訓を記すが、それは、中国で実名のほかに成人の男子に付けた「あざな」にかかわって生じたようであり、町村内の小区画を表す「あざ」も、「もじ」とは関わりがなく、日本で独自に生じた意味である。

## 茶の歴史

「茶」（チャ）も中国語の発音に基づく「字音」であり、また、一字の漢語である。辞典による異なりがあるが、『新字源 改訂新版』（角川書店）では、呉音ダ、漢音タ、唐音サで、チャは慣用音としている。

白川静『字通』（平凡社）は「茶は古い字書に見えず、その初文はおそらく「茶」であろう」という。「茶」は音「ト」で、「にがな」というキク科の多年草と、いわゆる「チャ」の二つをさす。「茶」は日常およそ見かけない字である。そう言えば芭蕉が「奥の細道」の旅に出る直前に住んでいた「杉風が別墅」を「採茶庵」といつた。解字辞典や漢和辞典によると、「にがな」と「チャ」の二つの植物を区別するために「チャ」の場合は一面減らしたものとし、一説にその時代を唐代とする。

日本の「茶」の歴史について、『日本大百科全書』（小学館）から関連部分を引用する。

喫茶の歴史のもっとも古いのは中国で、地理的に近いわが国には天平時代（七二九～七四九）にその風習が入ってきたようである。（中略）八〇五年（延暦二四）伝教大師最澄が茶の種子を持ち帰り比叡山麓に植えたと伝えられ、八〇六年（大同一）には弘法大師空海も茶の種子や茶を搗く石臼を持ち帰ったといわれている。

日本に存在しないもので、名称もなく中国語音に基づいて「チャ」と読みならわすことになる。

帰国僧たちの持ち帰った茶は団茶（蒸した葉を石臼でついて固めたもの）であった。葉用の役割をもつ貴重品で、朝廷や寺院などでわずかに飲まれるにすぎなかったようである。日本の

歴史書では『日本後記』弘仁六年の条に初めて現れる。

大僧都永忠、手自煎茶奉御。〈大僧都永忠、手自ら茶を煎じ奉御す。〉

永忠は唐に留学した僧。嵯峨天皇が唐崎に行幸した際、茶を煎じて奉った。西暦八一五年のことである。

同じ九世紀、嵯峨天皇は『凌雲集』に収める五言律詩の中で、詩を吟じつつ芳香の茶を搗ぎ琴の調べに耳を傾ける、とうたい（夏日左大將軍藤冬嗣閑居院）、菅原道真は『菅家文章』で、五言古詩「東方明未<sup>レ</sup>眠 悶飲一杯茶」〈東方明くるに未だ眠らず、悶えて飲む一杯の茶〉（仮中書懷詩）と詠む。茶の効用と道真の心境の一端をかいま見る思いがする。

日本で本格的な茶の栽培が始まるのは大分後れた十二世紀後半であった。宋から帰国した臨濟宗の開祖栄西（ようさいとも）は抹茶法を伝えるとともに種子を持ち帰った。譲り受けた、高山寺の明恵上人は栽培に取り組み、収穫した種子を全国各地に配って普及に努めた。これが後年の宇治、伊勢、狭山茶などの銘柄茶のもとをなしたという。

十四世紀に入ると、茶は日本人の生活の中にとけ込み、中国の「家常便飯」に基づいて「日常茶飯（事）」という四字熟語まで生まれるに至った。

「チャ」も tea も中国語から

「茶」は現在世界各国で日々愛用されている。品種、製法、飲用の仕方は個々に異なるが、「茶」の名称は各国語とも大もとは中国語に基づいている。それは大きくは「Cha (チャ)」系統のものと「Te (テエ)」系統のものとの二つに分かれるといわれる。陳舜臣『茶の話―茶事遍路』（朝日新聞社）、橋本実『茶の起源を探る』（淡交社）などによって整理すると、おおよそ次のようである。

広い中国では、一般に同じもの・ことを表すのに同一の字を用いても地域による発音の異なるの大きいことがある。「茶」は、中国の北方語や広東語では「Cha (チャ)」と呼ばれている。この発音は日本には古く学問僧などによってもたらされたが、西方にはロシア圏やシルクロードを中心とする陸路を経て伝わった。ロシアやモンゴルで chai (チャイ)、『インド chaya (チャヤ)』、『ペルシャ cha (チャ)』、またトルコでは chay (チャイ) に近い発音となった。

一方、アモイ(廈門)を含む福建語では「Te (テエ)」と発音される。大航海時代、オランダの東インド会社は十七世紀になって港湾都市アモイから茶を輸入しヨーロッパ諸国と交易を行った。その「Te (テエ)」系統の発音は現物とともに海路によって西方に伝播していった。オランダ thee (テー)、『ドイツ Tee (テー)』、『スペイン te (テ)』、『フランス thé (テ)』、『イギリ

ス tea (ティー)』が用いられている。そうした中で、ポルトガルは「cha (チャ)」系統の発音を持つ。当時貿易面でオランダと張り合っており、植民地マカオ(広東語系)から直接茶を輸入した。その発音が入り込み今に至っているのだという。通常これらは紅茶である。

世界でこよなく茶を愛好し、こだわりをもつ国は、日本とイギリスであるとされる。

日本語の「チャ」も、英語の「tea」も、その種類はいろいろであるが、名称はともに中国語に由来するものであった。